『　少年はニワトリと夢を見る　』

サリｎｇＲＯＣＫ　＋　山田蟲男

【登場人物】　二人の俳優で全ての役を演じる

村上くん
ユキオ
しみ（声）
ニワトリ頭
死神
文豪（潜水服）

ＡＣＴ・１

暗闇の中。
微かに波が打ち寄せる音が聞こえている。
二人の少年の小さくひそめた声がする。

ユキオの声　村上くん、村上くん。
村上くんの声　おう。
ユキオの声　せーの。

マッチを擦る音がして、マッチに炎がつく。
二人の顔が浮かび上がる。
マッチの火をろうそくに移す。
ろうそくは、小さいケーキに刺さっている。

ユキオ　へへ……
村上くん　ユキオ。
ユキオ　うん、なに？
村上くん　歌ってーや。
ユキオ　うん！（歌）ハーピバースデーツーユー、ハーピバースデーツーユー、ハーピバースデーディア

村上くん、ゆっくり火に手を近づけていく。

村上くん　あちっ……！
ユキオ　え？！
村上くん　いったー……
ユキオ　そらそうやん。どしたん？
村上くん　いやあ、なんでかなと思って。
ユキオ　ん、なにが？
村上くん　燃えてない時は触れるやん。燃えてる時はなんで触られへんのやろ？
ユキオ　ほんまや！　そんなん考えたことなかった。さすがやな。
村上くん　おう。……うわあ……。
ユキオ　なに？
村上くん　もう１６になってもた……。
ユキオ　どしたん？
村上くん　南川裕二は、１５歳で大賞とって、小説家デビューしてるやん。
ユキオ　そうやっけ！　やっぱすごいなー、南川裕二！
村上くん　俺もう１６や……。
ユキオ　村上くんは、絶対すごい小説家になるって。
村上くん　……。あ。（ノートと鉛筆を取り出し、書き始める）
ユキオ　なんか思いついたん？
村上くん　うん。次書くやつの設定。……（ノートに書いている）

ユキオ　……（しばらく村上くんを見ている）
村上くん　……へへ。
ユキオ　あ、神聖なものなんちゃう？
村上くん　は？（ノートと鉛筆をしまう）
ユキオ　火。触られへん理由。
村上くん　ああ。
ユキオ　神聖なものは、触ったらあかんて言うやん。神さま的な。
村上くん　神さま……
ユキオ　火はな、神聖やねん。
村上くん　へー……。
ユキオ　（村上くんが感心してるのが嬉しい）へへへ……

村上くん、炎を見つめる。

村上くん　……きれいなあ。
ユキオ　なあなあ村上くん。誕生日のとき、ろうそくに火つけて、吹き消すやろ。なんでか知ってる？
村上くん　ええ？　……さあ。
ユキオ　火がな、消えた時に出る煙が、願い事を天に届かすねんて。だから消すねん。
村上くん　……へー。
ユキオ　本に書いとった。
村上くん　……。歌ってぇや。続き。
ユキオ　え……あ、うん！　えーと……あ、（歌の続き）ディア村上クーン！　ハーピバースデーツーユー。ワー！　……消そ。

村上くんは、火を吹き消す。
暗闇。

ユキオの声　おもろい小説、書けますように。
村上くんの声　おまえの願い事を届かすん？
ユキオの声　あ、ごめん！　でも村上くんも同じ願いやからいいやん！
村上くんの声　でもこれ俺のろうそくやねんから、俺の分だけかなうわ。
ユキオの声　なにそのルール！
村上くんの声　文豪になれますように。
ユキオの声　あっ！　僕も！　温泉旅館で缶詰できますように。
村上くんの声　変な願い事。
ユキオの声　えっ、ごめん！
村上くんの声　なろな。文豪。
ユキオの声　うん。
村上くんの声　勝負やな。
ユキオの声　うん。勝負や。
村上くんの声　……多くの人の心を動かせる小説が書けますように。

パチパチと火が燃えている音。

ユキオの声　「村上くんに」おもろいって言ってもらえるような小説、書けますように。

ゴウゴウと火が燃える音。
徐々にあたりが見え始めると、村上くんが立っている。
右手には真っ赤な包丁。
村上くんが、視線を遠くに向ける。

村上くん　……上空は赤い夕焼けです。赤い、ピンクの、赤い、空に黒い雲です。赤い橙の、黄色の、紫の空が燃えています。空まで焼けています……。煙が。上空に昇って溶けていきます。（視線を下げて）少年の目の前で、少年のアパートが炎に包まれています。真っ赤っかの。真っ黒の。黄色の。金色の。炎が揺らめいてます。それを見ていたら2年前の誕生日、親友と秘密基地で見たケーキのろうそくを思い出しました。……暑い。（汗を拭いて、見上げる）……あー……きれいなぁ……。赤い炎と黒い家……きれい……こんなときやのに……こんなときやから？

村上くんは包丁を落とし、服のポケットを探る。
鉛筆と、小さなノートを取り出す。
ノートを開き、そこに鉛筆で書きつけていく。

村上くん　……ぐさ、ずる、にゅりにゅり……ちゃう、もっと……ぐぶ、ずずず、ちゃくちゃく……

遠くから、少年時代のユキオの声が聞こえる。

ユキオの声　村上くーーーーーん……！　村上くーーーーーーーーーーん……！

村上くん　ユキオ……

ユキオの声　村上くーーーーーん！　明日、市内行こうやーーーー本屋行こーーーー！

村上くん　明日……。明日……？　ユキオ……俺、あした、無理と思うーーーーーーーーーー！　明後日もーーーーー！　もしかしたら、もう、ずっと無理……ずっと……無理……無理かもしれん……

村上くん、落とした包丁を拾って握りしめる。
鉄の扉が閉まるような音がする。
そして、静寂。
……壁の一部が、そっと開く。
死神が顔を出す。
煌々と燃えるろうそくを持っている。

死神　……どう？
村上くん　……

死神　……今、どう？
村上くん　……
死神　（ろうそくを示して）まだ、こんだけあるけど、どうする？　消そか？
村上くん　……はあ？　書くに決まってるやん。（書き始める）
死神　はぁい……

壁が閉まる。

村上くんの声　はあぁぁぁぁ……

村上くんのむせび泣く声……

ＡＣＴ・２　２１歳

薄暗い部屋。
たくさんの本がある。
村上くんがひとり、座っている。
ぼろぼろのノートに小さな鉛筆で何か、書きつけている。
そこへ、２１歳のユキオが来る。
傘を持っている。

ユキオ　村上くん……
村上くん　おー！　ユキオ！　（傘に気づいて）雨？
ユキオ　うん。急にザーッて。慌てて買ったわ。
村上くん　そうなんや。
ユキオ　村上くん、元気？
村上くん　おー！　あたりまえやんか。
ユキオ　よかったー。
村上くん　なんやねん。
ユキオ　ごめんな。なかなか来れんで。レポートやらテストやら忙しくてさ。
村上くん　おー、大変やな。あ、こないだくれた本、読んだで。（本を一冊取って見せる）
ユキオ　本？
村上くん　くれたやんか。海の底でプランクトンの死骸を集める人の話。
ユキオ　あー……その本、村上くんにあげたんやっけ。
村上くん　おまえめっちゃオモロイ言うてたけどさー。
ユキオ　おん。どやった？
村上くん　あんまおもんなかったわー。
ユキオ　えー？
村上くん　いや、なんか高尚なことを書いてるつもりなんか知らんけどさ。芸術家気取り感っていうか、俺の考えてることなんか凡人にはわからないでしょ、みたいなあっさいプレゼン感が鼻につくっていうか。　そもそもさ、小説なんか大衆のためにあるもんなんやから、多くの人が楽しめるもんを書かなあかんやろ。

ユキオ　あー、そっかなー。
村上くん　わからんもんなんか、誰も求めてないねん。読者はまず、わかりたいねん。わかるのが最低限やねん。わかった上でそれが面白いかどうかって段階になんねん。
ユキオ　そっかぁー。さすがやなー。
村上くん　おう。なあ、他にいい本見つけた？　俺はこの、
ユキオ　あー、ちょっと最近忙しくて。バイトも急に人辞めてさあ。
村上くん　……へえー。
ユキオ　夜勤１１連勤。ほんま、働かせすぎやろ。森田さんが言っててんけどな、
村上くん　森田？
ユキオ　あ、ああ、森田さんって、同じバイトの。おもろい人やねん。
村上くん　へー。
ユキオ　森田さんがな、もうな、うちの店はな、全然ホッとせーへんステーションやで！　言うて。ぷぷぷぷ。
村上くん　……え？
ユキオ　え？　あ、そっか。これ入れな。そもそもうちの店はな、街のホットステーションっていうのが売りやねんけどな。森田さんが、僕らバイトにとっては全然ホッとせーへんステーションやなあって……ぷぷぷ。
村上くん　……
ユキオ　あれ？　あれ？　あーそっか！　テレビないもんな！　あー。あんな。うちの店な、コマーシャルとかでな、あ、テレビのな。それで「街のホットステーション」とか陽気に言ってるねんけどな。でも僕らバイトにとってはそんなん全然ホッとせーへんステーションやなあって森田さんが……ぷぷぷ……あれ？　あ、言い方？！　（声を低くして）ホッとせーへんステーションやで！　……ちゃうんか？！　あかんな、僕！　ちょ、今度森田さん連れてくるわ！　森田さん、もう最強やから！　最高に最強やから！
村上くん　（優しく）おまえ、書けてるか？
ユキオ　え？
村上くん　バイトはな、やったらいいと思うで。人生の経験になるし。いろんな人の話も聞ける。
ユキオ　え……うん。
村上くん　でも、そこにそんな時間使ってる場合か？
ユキオ　え……。
村上くん　おまえはなんのためにバイトしてるんや？
ユキオ　……。
村上くん　バイトのためにバイトしてるんか？
ユキオ　……ううん。ほんまやな、ごめん、村上くん。
村上くん　おう。今から変えたらいいねん。バイトなんかすぐ辞めよ。
ユキオ　うん……わかった！　すぐ辞める！
村上くん　おう！　じゃあ今日は書けるな！
ユキオ　でも今日は夜勤やねん。
村上くん　……。
ユキオ　え？　……あ！
村上くん　はあー……
ユキオ　で、でも……今日はしょうがなくない？　だって、今日の今日やで？　代わりの人、見つけるんも大変やし……。
村上くん　自信あるんか。

ユキオ　え？
村上くん　書く時間削ってもええもん書けるっていうそういう自信あるってことか？
ユキオ　そ、そういうんじゃないけど……。
村上くん　でもユキオやってるんそういうことやん。
ユキオ　……で、でも、急に辞めたら、みんなに迷惑……
村上くん　ええねん。俺らは、バイトのためにバイトしてるようなやつらとは次元が違うんやから。
ユキオ　え……？
村上くん　俺らの１時間は、後世に残る名作を産み出すかもしれん１時間やねんで？　その１時間を……時給っていくらなん？
ユキオ　今んとこは９００円。
村上くん　たった９００円程度で貴重な１時間を売ってあげとったんや。今までありがとう、すみませんでしたって言ってもらってもいいぐらいや。
ユキオ　……さすがやな、村上くんは。
村上くん　ええ？
ユキオ　常識には囚われへんっていうかさ。
村上くん　常識？　いや、俺のほうが常識的やん。周りが非常識やねん。
ユキオ　すごいな！　多数派を非常識呼ばわりするって！
村上くん　おう。あたりまえやん。文豪はいつも多数派に理解されへんねん。
ユキオ　そっ、かあ……。そうやんな……。
村上くん　あ、そう。今回の、どやった？
ユキオ　え？
村上くん　送ったやんけ。届いたやろ？　俺の新作。
ユキオ　ああー！
村上くん　あれ、絶対おまえ好きやと思うねん！
ユキオ　……えぇっと……
村上くん　……だってだって、村上くん、書くん早いねんもん！　高校生んときは、同時に書き終わって、感想言い合って、で、同時に書き始めて、同時に書き終わって、また感想言い合って、また同時に書き始めて……って、ちょうど良かったやん。でも最近村上くんから送られてくるん、すごい早いし、しかもすごいページ数の大作ばっかり。僕、他にもいろいろやらなあかんことあって……。
ユキオ　……
村上くん　ごご、ごめん……
ユキオ　ええよ。バイト辞めたらちょっとは変わるやろ。で？　あれはどうなったん？
村上くん　え？
ユキオ　書き終わった？　宇宙人の話。
村上くん　え？
ユキオ　いや、こないだ言うてたやんけ。
村上くん　こないだ？
ユキオ　言うてたやんか。実は宇宙人が地球に来てて、いろんなとこに潜んでて遺伝子操作してるってやつ。
村上くん　あ、ああー……
ユキオ　読ませてぇや。
村上くん　あー……うぅん。

村上くん　え？
ユキオ　それは……やめてん。
村上くん　やめた？
ユキオ　だって宇宙人なんかおるわけないし。なあ？
村上くん　……そんで、別のん書いてんの？
ユキオ　ああー……まだ、考えてるだけやけど。へへ……

ユキオ、ポケットから煙草を取り出し、くわえようとする。

村上くん　それ、アカンで多分。
ユキオ　え？　あ、ああ。そうなん？　あ、そらそうか、そうやんな。ゴメンゴメン。

ユキオ、タバコを仕舞う。

村上くん　タバコ……、吸うんや。
ユキオ　え？　ああ、うん。高木くんにつられてハマってもうた。これが一番うまいねん。
村上くん　高木……
ユキオ　うん。同じフットサルサークルの。シュッとしててカッコイイねん。すごい頭いいねんけどな、それを見せへんっていうか、
村上くん　どんな話考えてんの？
ユキオ　え？
村上くん　小説。
ユキオ　あー。うん、でもまだ考えてるだけやし……。
村上くん　いいやん。喋ったらまとまるやんか。聞いたるから言えや。
ユキオ　うんー……
村上くん　……（ユキオをじっと見ている）
ユキオ　（村上くんを見つめていて）……あんな。
村上くん　お。
ユキオ　いっつもひとりぼっちの男の子がおってな。
村上くん　……うん。
ユキオ　毎日ひとりでつまんないなーって思っててな。
村上くん　うん。
ユキオ　やることないからぼーっと壁見てたら、その壁のしみがな、人の形に見えてくるねん。
村上くん　うん……
ユキオ　ほんで、男の子がそれに顔描くねん。そしたらそいつが、喋りはじめるねん。
村上くん　……えっ……
ユキオ　そいつめっちゃ喋ってな、主人公の男の子と仲良くなって、親友やな！　とかなって、男の子も家におるんが楽しくなるねんけどな。
村上くん　うん……
ユキオ　実際はそのしみの喋ることは全部、主人公の男の子の心の声やからな。だから、結局はひとりで喋ってたーってことやねん。
村上くん　……うん。
ユキオ　どう？
村上くん　え？

ユキオ　昔の僕の話。村上くんに会う前。……へへ。どう思う？
村上くん　……や、オチをどうするかちゃう。
ユキオ　……あー……そっか……。
村上くん　まあ、でも一回書いてみたらええねん。
ユキオ　あー、うんー……。
村上くん　書き上げなわからんこと多いやんけ。なんにしろ、終わらすねん。そっからや。終わらさんかったら書いてないのと一緒や、て前から言うてるやろ。

ユキオ　うん……。
村上くん　いけるって。おまえ、なかなか惜しいとこまでいってるで。
ユキオ　えー……？　でも僕、やっぱり才能ないんかも……
村上くん　いやいやいやいや、おまえな、才能があるかないかなんか、とことんまでそれと向き合わんとわからんで。生ぬるいレベルで向き合ってても一生わからんねん。だから、まずは、とことん小説と向き合わな。

ユキオ　……
村上くん　それにおまえ、卒業したらどうすんねん？　普通に就職できると思うんか？
ユキオ　え……？
村上くん　無理やろ。ユキオは。
ユキオ　……。でも僕、大学な、結構いいとこ行ってるんやで。
村上くん　いやいやいやいや、
ユキオ　それにゼミの発表でも結構褒められて……
村上くん　ちっさいこと自慢すんなって。
ユキオ　……

村上くん　（ユキオをしっかり見て）俺も書くから。おまえもちゃんと書けや。
ユキオ　……。（村上くんを見ている）
村上くん　……俺ら二人で今の小説業界ひっくり返したろうや。
ユキオ　……うん。そうやな……。
村上くん　ええやんか。なんか、わくわくすんな。
ユキオ　ほんまやな！　あ、そろそろ行かなあかんみたい。
村上くん　おう。そうか。
ユキオ　じゃあな。テスト終わったらまたすぐ来るわ！
村上くん　おう！

ユキオ、去る。
村上くんは、少し笑う。

村上くん　ユキオは変わらんなあ。

村上くんは、ノートを広げる。
なにか書こうとするが、書かずに、座って天井を見つめる。
村上くん、壁を振り向く。
その壁には、人型に見えるしみがある。
村上くんはゆっくりその部分に近づく。
村上くんはしみに、えんぴつで、目と口を描く。
そして、そのしみを触る。

しみ　ふへへへへ……
村上くん　え？
しみ　こそばいこそばい
村上くん　ああ……。ごめん。
しみ　ええで。いっぱい喋ろ。
村上くん　……おう……
しみ　なあ、嬉しかったな。
村上くん　なにが？
しみ　あの子。さっきの子。久しぶりに来てくれたな。
村上くん　ユキオ？　ついこないだ来たやん。この本持って。
しみ　それ、1年半も前やで。
村上くん　そうやっけ？
しみ　あ、あれやろ？　一日は長いのに、一年は早いってやつ。毎日同じことしかしてないから。
村上くん　毎日同じこと……。（ノートと鉛筆を手に取る）
しみ　毎日おんなじ毎日。永遠に続く、おんなじ毎日。
村上くん　でも、一瞬一瞬、ちゃんと考えてる。
しみ　同じ時間に起きて同じ時間にご飯食べて同じように書いて。
村上くん　でも、毎日違う課題と向き合ってる。
しみ　同じ部屋の同じ景色。
村上くん　でも、成長してる。
しみ　毎日毎日。
村上くん　考えて書いてる。
しみ　これだけに集中できるから、書き上がるんも早いよな。
村上くん　そう。
しみ　でもあの子は他にいろいろやってるんやなぁ。
村上くん　……なんか、言っとったなあ。
しみ　大学にバイト。テストにレポート、フットサルサークル。
村上くん　……アホやねん。無駄に忙しくして。
しみ　それに、森田さんや高木くん。
村上くん　……はは。やっと俺以外の友達できたんやなー。
しみ　今まではずっと村上くんだけ？
村上くん　そうやねん。あいつな、小学校んとき、いじめられとってん。
しみ　あれま。
村上くん　あいつんち、ニワトリめっちゃいっぱい飼っててさ。めっちゃ臭かってん。そんであいつにもその匂い、しみついててもうててさ。周りからニワトリニワトリー言うてからかわれてて。
しみ　かわいそう。
村上くん　いっつも一人やった。
しみ　そこに村上くん登場？
村上くん　登場っつーか……。松ぼっくりって、こう、開いてるやん。ひだひだのとこ。あれ、水につけたら閉じるん知ってる？
しみ　へえ？　知らんかった。それが？

村上くん　あいつが教えてくれてん。小４のときやったかな。まだ喋ったこともなかったときやってんけど。あいつ、池んとこでさ、一人でじーっと座ってて。何やってんねやろ、って覗き込んだら、パッてこっち振り向いて、閉じた松ぼっくりバッて出してきて。「見て！閉じるねん！」って。なんかめっちゃ嬉しそうに。ほんで足元見たら、大量の閉じた松ぼっくりあってさ。いや、どんだけ集めてきて、どんだけ水に浸けとんねんー、って。（笑う）

しみ　かわいいな。

村上くん　ほんで、蟻はなんで迷子になれへんのかとか、蟻の寿命がどんくらいやとかすーごい勢いでブワー喋ってきて。別に教えてって頼んでへんねん俺は。（笑う）

しみ　それで？

村上くん　ほんで、こいつオモロイなーと思ってなんとなく一緒におるようになって……。俺、周りのやつらに「ニワトリの友達」って言われるようになってもうたわ。（笑う）

しみ　それからずっと一緒？

村上くん　そうやなー。海のそばの洞窟見つけてからは、夜も一緒におったなあ。

しみ　洞窟。

村上くん　小説書くようになってからはさ、捨てられてたちっさい机、二人で拾って運んできて、二人とも家から懐中電灯持ってきて、その明かりの中でいっぱい書いた。

しみ　あの子も書いた？

村上くん　ふたりで書いた。読み合った。……あいつ、字へたやねん。（笑う）

しみ　ふうん。あの子、また来てくれるかなあ？

村上くん　は？

しみ　次、いつ来てくれるかなあ。

村上くん　いや、すぐ来るやろ。

しみ　そうやな。

村上くん　そうやで。

しみ　……文豪になって有名になったら、来てくれるやろなあ。

村上くん　……文豪になって有名になったら、いろんな人が来るわ……。

しみ　あれ、書き終わらせなあかんのちゃう。

村上くん　あれ書き上げたら……

しみ　絶対出版社から声かかるよ。村上くんの本がお店に並ぶよ。いろんな人が村上くんの小説を読むよ。

村上くん　……。

村上くんは、古い、一冊のノートを引っ張り出してくる。
ノートを開く。

しみ　ちょっと読んでみて。

村上くん　少年は、９歳の時、海の見えるのどかな町に引っ越しました。

しみ　そのへんはもうええわ。夕焼け。夕焼けのとこからにしよ。

村上くんはノートを数ページめくる。

村上くん　１８歳の誕生日。その日の夕焼けは、今まで見たことがないと思うほど真っ赤でした。

しみ　そこからいこ……

村上くん　少年は、アパートを包んでいる「炎」を見つめていました。お母さんと二人で過ごしたアパートが真っ黒になってどんどん崩れていきます。握りしめた肉切り包丁は、

しみ　……あかん。包丁はそこで出すんやめよ。

村上くん　（その部分を消して）……古い木造アパート、雨漏りのシミが広がる6畳一間。その部屋の隅に座って、お母さんは、たまに折り紙をしていました。ポストに勝手に入れられたカラフルなチラシ。それで作った鶴や、カニや、恐竜が部屋のあちこちに飾ってありました。少年はその折り紙が好きでした。

しみ　ほんで？　他にはなにが見えたんや？

村上くん　……床にはたくさんのビールの空き缶。灰皿に溢れるタバコの吸い殻。テレビを見ているお母さんの背中。それが少年の日常でした。少年は、信じていました。自分の未来は自分で選べる。少年が文豪になれば、こんな貧しい生活から抜け出して、楽しく暮らせる。少年も、お母さんも。だから少年は毎日、学校に行きながら、家事をしながら、寝る時間を減らして、紙という紙に物語を書いていたのです。なのに……「おい、金あるか？」アイツはいつも、

しみ　「アイツ」でいいか？　もっと別の言い回しの方がいいんちゃうか？

村上くん　（書き直して）あの男はいつも突然やってきて……

しみ　ほんで？

村上くん　「おい、どこや金！」お母さんは背中を向けたまま「おい、どこに隠しとんねん……」男は、乱暴に引き出しを開け、中のものをばらまいて、座布団を蹴散らします……。「おい、二度と来んなって言ったやろ！」少年がそう言うと男は「おいこらぁ。なんやその口のきき方？　ああ？　親に向かってなんや？！」少年の視界が歪みました。「おおい、こらぁ、死ねや、死ねやこらぁ」そして男は、少年の顔を踏みつけながら「おまえさえおらへんかったら、おまえさえ生まれて来んかったらなあ、オレもこんな生活せんで済んだんや！」

しみ　あかん。もっと書ける。もっと力強く。もっとシンプルに。

村上くん　どうできる……？

しみ　もっと考えるんや。何回も読んで。何回も考えて。でも、まずはいったん先進もう。

村上くん　……ある夏の日の夕方。「なあ、本屋行こうや！」親友が少年を誘いました。「ええな！……でも、今日は帰るわ。」「え、あっ、そっか！　誕生日や！」「おう。今日はお母さんがご飯作って待ってるから」「うん！　じゃあ明日！　明日、本屋行こう！」

しみ　ここもなんかちょっと足りへんな。あとでもっかい、ここいこ。メモしといて。

村上くん　（書いて）少年がアパートのドアを開けようとした時。「おら！　もっと泣けや！」アイツの声と、お母さんの、泣いているような、叫んでいるような、あの嫌な声……。少年は静かにドアを開けました。窓から差し込む逆光と、その中で蠢く二つの黒い影。「ああ？　なんやねんお前どっか行けや」少年は動けませんでした。「おい、おまえ聞こえへんのか、早よ消えろ」だって今日は、お母さんがご飯を作って待ってくれているはずの日。「チッ、何回言わせんねんおまえこらぁ、ああ、早よ出て行かんかいこらぁ！」そう言いながら、男が少年を殴り倒しました。

しみ　それやめよ。

村上くん　あかん。これは絶対入れる。

しみ　そうか。そうやな。思い入れが強いのは大事や。

村上くん　「おおい、なんやねんこいつ。おおいっ、おまえどんな教育しとんねん」男はそう言いながら、冷蔵庫から缶ビールを出して飲み始めると「あああああ！」お母さんが男を叩きました。「それぇ！　それぇ！」「何やお前、やめろや！　おい！」「返してぇ！　返し

てよぇ！　あたしのビール。あたしのビール」「やめんかいこら、うっとおしい！」男は、お母さんの手を振り払い、お腹を蹴りつけました。「こらぁ！！　この、股開くだけしか脳のないアル中が！」男がもう一度お母さんを蹴ろうとしたとき、少年は言いました。「やめろや」

しみ　そんな冷静やったか？

村上くん　冷静やったよ。

しみ　あかん。ちゃうかった。ちゃんと、本当の体験書かなあかん。

村上くん　……。（その部分を消して）「やめろや、クズ！」「ああ？　おまえ俺に言ってんのか？　俺に言ってんのかこらぁ！」「……おまえみたいなクズ、世の中に必要ないねん！」「（笑って）社会も知らんクソガキが偉そうにより、なあおまえ、小説家になりたいらしいな。有名な作家先生になってくれるんか？　ありがたいなぁ、早くなれや、なってくれや、ほんで助けてくや、おまえの、お父ちゃんを。おまえなあ、オレがクズなんやったらよ、おまえはクズとクズの間に生まれたクソガキや！　そんなお前が小説家？（笑い出し）何を夢見とんねん！」男は少年は蹴りつけました。何度も。何度も。何度も何度も何度も。「こんな無駄なことしてる時間あるんやったらよ、働いて金、稼いでこんかい」遠のく意識の中で、破られた原稿用紙がヒラヒラ舞っているのが見えました……。それは少年が、毎日、毎日毎日、少しずつ書き上げていった原稿でした。「返してよぅ。あたしのビール、あたしのビール」「うるさいのぅ、このアル中が……黙らしたろか……？」「あかん……お母さんが……お母さんが……」少年は、力を振り絞って流しまで這って行き、置いてあった肉切り包丁を掴んで……。男の背中の真ん中に、ざっくり差し込みました。

しみ　背中……真ん中……ざっくり……ほんまにその言葉か……？

村上くん　これも検討。（書いて）……肉切り包丁は赤く、少年の服も赤く染まりました。「おれとお母さんの人生の、邪魔すんな。」少年はそう言って、振り向こうとする男の横顔に、もう一回、二回、三回、四回……「はあはあはあ、お母さん。大丈夫？」お母さんは、倒れている男を抱きしめました。「お父ちゃん、お父ちゃん」そして、お母さんは少年を睨みつけ「返して。返してよぉ！　あんたは、あたしからどれだけ奪ったら気がすむのよ？はぁぁ、あの時、あんたを殺す勇気があたしにあったら……。あんたが死ねばよかったのに。」

しみ　……ちょっと待って。

村上くん　……

しみ　ウン、絶対名作になるはずや……

村上くん　……。

しみ　時間かけよ。頭冷やして考えて。村上くんやったらいけるよ。

死神が現れる壁が少し開いている。

死神　……今、どう？

村上くん　……

死神　……

村上くん　……いいよ。おもろい作品書けそうやん。（書き始める）

死神　……

村上くん　なんやねん。

死神　これ。（ろうそくを見せて）

村上くん　おう。
死神　なくなるまでしかないよ。
村上くん　……わかってる。

死神は、壁を閉じる。
雨が降る音。

村上くん　あ、雨？

遠くで雷が鳴る。
電気がチカチカして、消える。
暗闇。
微かに波が打ち寄せる音。
少年たちのひそめた声が聞こえる。

ユキオの声　村上くん。
村上くんの声　おおぅ。まだ起きてたん。
ユキオの声　月の灯りで書いてるなんて、文豪みたい。
村上くんの声　ぶんごう？
ユキオの声　ウン。作家の中でも、特にすごい人のこと。
村上くんの声　へー。……文豪って儲かる？
ユキオの声　そらそうなんちゃう？　文豪やもん。
村上くんの声　文豪って、尊敬される？
ユキオの声　え？　めっちゃされるよ！
村上くんの声　文豪って、幸せ？
ユキオの声　そら幸せや！
村上くんの声　なあ、もしユキオが文豪になったら、お母さんは喜ぶと思う？
ユキオの声　絶対めっちゃ喜んでくれると思う！
村上くんの声　なあ。おれも、「文豪」……なれるかな。
ユキオの声　なれるよ。まだまだ人生長いもん。可能性しかないもん。
村上くんの声　おお。へへ……。やんな。

ＡＣＴ・３　２６歳

薄暗い部屋。
たくさんの本がある。
村上くんがひとり、座っている。
ぼろぼろのノートに、書きつけている。
そこへ、２６歳のユキオがくる。
ユキオはハンカチで汗を拭きながら、現れる。

ユキオ　（今までと違うイントネーションで）村上くん……

村上くん　おー！　ユキオ！
ユキオ　（今までと違うイントネーションで）村上くん……元気だった？
村上くん　おー、元気元気！　テスト終わったんか？
ユキオ　（今までと違うイントネーションで）え？　テスト？
村上くん　え？
ユキオ　（今までと違うイントネーションで）あ、悪かったね、ずっと来れなくて。ふー、あちー。ほんと灼熱だよね。もう、燃えちゃうっつーの。
村上くん　……やめろや、変な喋り方。気持ち悪い。
ユキオ　え？　ああー！　ごめんごめん。こっち帰ってきたん久しぶりやからさ。にしても、こっち暑すぎるなー！
村上くん　え？
ユキオ　東京。あっちはもうちょっと涼しいで。
村上くん　とうきょう……
ユキオ　就職したんがあっちやってんけどさ。もうめちゃめちゃブラックな会社やってさ。
村上くん　へー……
ユキオ　当たり前に残業代なくて。研修も洗脳みたいな感じやってさ。そんときから怪しいなーとは思っててんけどな。
村上くん　ちょ、またかー。
ユキオ　え？
村上くん　また忙しい仕事して。全然変わってへんやん。学習せーへんなあ。なんのためにおまえは、
ユキオ　でもその仕事辞めてさ。だから気軽にこっちに帰って来れるようになって。前はな、神保町住んでてんけどさ。今は桜新町。
村上くん　……へー……。
ユキオ　２３区やけど自然も多くて、割とのどかやねんで。
村上くん　ああ～、ユキオはのどかな方がええやろな～！
ユキオ　え？
村上くん　だってユキオ、ニワトリ３２羽おった家の子やん。
ユキオ　あー……昔、そやったなあ。
村上くん　くっさかったよなあ。
ユキオ　はは……。もういいやんー。
村上くん　おっさんの顔の看板あたりから、もうニワトリの匂い、ぶわ～ってくんねん！
ユキオ　……。ははは……
村上くん　今ニワトリどんぐらいおんの？　めっちゃ増えてるんちゃうん。
ユキオ　え？　もう今はおらんよ。
村上くん　え……？　え、そうなん？
ユキオ　全部とっくに死んでもうたわ。
村上くん　……あ……そうなん、や……
ユキオ　懐かしいなあ。
村上くん　……
ユキオ　あ、桜新町の家って前の家と違ってな、
村上くん　書けてんのか？
ユキオ　え？
村上くん　いや、こないだ言うてた壁のしみの話。書けてんのか？　って。

ユキオ　え？　しみ？　んん？
村上くん　え。いや、こないだ来たとき……言うてたやん……。
ユキオ　んー……？
村上くん　え？　いや、こないだ……。
ユキオ　あ、大学んとき？　いやいや。それもう５年前やん。
村上くん　……５年……？
ユキオ　覚えてないってー。
村上くん　……５年……。
ユキオ　僕な、起業してん。
村上くん　へ……？
ユキオ　自分で、会社、はじめてん。
村上くん　え……へー……。
ユキオ　クラウド型のｅラーニングサービス提供してんねんけどさ。今年からＢｔｏＣにも展開していくから、来年以降、年収ヤバいことになるで。
村上くん　……
ユキオ　社員も１４０人まで増えてさ。
村上くん　……
ユキオ　最近、オフィスも渋谷に移してん。
村上くん　……

ユキオのスマホの通知音。
ユキオ、スマホを操作する。

ユキオ　あ……（スマホの待受を見せる）……知ってる？　女優の。
村上くん　……知らん。
ユキオ　あー、そっか。
村上くん　……ファンなん？
ユキオ　今の女。僕の。
村上くん　……
ユキオ　そやねん。いろいろ大変。
村上くん　……
ユキオ　……って感じなんやけど……（村上くんを伺う）
村上くん　……うん？
ユキオ　いや……まあ……

ユキオ、タバコを取り出し、くわえる。

村上くん　それ……
ユキオ　え？
村上くん　アカンと思うって。それ。
ユキオ　え？　ああ！　ああ、そらアカンよな。ゴメンゴメン。
村上くん　言うたやんけ……
ユキオ　（タバコを仕舞いながら）え？
村上くん　前んとき……

ユキオ　癖やわ。もう今チェーンやから。
村上くん　チェーン？
ユキオ　え？
村上くん　あ……？
ユキオ　いや……次々に……。……ううん。……まあ、そういうことで、村上くんのこと、結構助けられると思うからさ。またなんでも言うてえや。
村上くん　ほんで？
ユキオ　え？
村上くん　いつ書くねん。ユキオ。
ユキオ　いや……だから今は起業して……
村上くん　おまえな、いったん書き始めななんも始まらんで？
ユキオ　……いやだから……
村上くん　わかるよ。おれもな、ちょっと前に、なかなか書き出されへん時期あったからさ。思いつくもん全部、おもんない気がしてさ。これはあれに似てる、これは意味不明、複雑すぎ、これはペラペラやわ、とかな。ほんで、世の中にはおもろい本がいっぱいあるのに、おれが書く意味あんのかなーとかさ。そこまでいったで。めちゃめちゃ苦しい。でもな。書いたで。ぐわーってなりながら、なんとか書き上げたで。そしたらな。その話、めっちゃおもろなっとってん。最近の中では最高傑作。な？　だからユキオもさ。自分で書く前に諦めてたらなんもないで。
ユキオ　……。……はは。わかったわかった。じゃあまた来るから。
村上くん　ユキオ。
ユキオ　うん？
村上くん　（雑誌を取り出して、開き、床に置く）……ほら。
ユキオ　なに？（ユキオ、雑誌を手に取る）
村上くん　その小説、南川裕二に選評もらった。
ユキオ　えっ？！（雑誌をじっくり見る）……ほんまや……。（雑誌の表紙を見て）２年前……。
村上くん　最終候補に残ったからさ。
ユキオ　……。（選評を読んでいる）
村上くん　ま、賞はのがしたけど。
ユキオ　いやすごい……（言ってしまって慌てて顔を背ける）
村上くん　なー？！　俺も南川裕二に作品読んでもらえるところまで来てん。
ユキオ　……うん……。
村上くん　ユキオ。おまえも頑張れや。
ユキオ　……え？
村上くん　年収とかダサいこと言うなって。
ユキオ　……
村上くん　どうせまだちゃんとした友達もおらんねやろ？
ユキオ　え、あ、いや、おるよ……めっちゃ飲みに誘われるし……
村上くん　それはちゃんとした、ほんまの友達か？
ユキオ　え？
村上くん　おまえが社長じゃなくても、そいつらはおまえを飲みに誘うんか？
ユキオ　……
村上くん　そもそもおまえはほんまにそいつらと飲みに行きたいんか？　そいつらと過ごす時間はおまえとってほんまに豊かな時間なんか？　どうせなんの学びもないような、うわべの

話ばっかりしてるんやろ？　そんなん自分の大事な時間をドブに捨ててるようなモンやで。

ユキオ　……ははは。

村上くん　だから。小説書いて。賞取って。本出して。多くの人にすごいって認められて。ほんでお互いを高め合えるようなレベルの高い一生モンの友達、作るんやんか。

ユキオ　……うん、そうやな。（雑誌を床に置く）

村上くん　な！　ほらあ。もうユキオはちゃんとしろやあ。何歳なってん、自分。

ユキオ　うん。２６歳。ごめん。

村上くん　ほな次、どんな話にする？

ユキオ　……。（村上くんを見る）

村上くん　冒険ものやれや。多分向いてるで。

ユキオ　……

村上くん　なんやねん？

ユキオ　小学校３年のとき。習字の授業、覚えてる？　村上くんが転校してきてすぐの頃。

村上くん　え？

ユキオ　僕、習字苦手やったから、字、ふにゃふにゃでさ。

村上くん　おう。

ユキオ　みんなに「ニワトリ、ミミズ書いている。ニワトリがエサのミミズ書いてる―食いたいんや？　食いたいんや？」って言われまくってさ。

村上くん　そうやったっけ。

ユキオ　もう書くんやめよ、って筆折って捨てたってん。

村上くん　おお。

ユキオ　そのときな、村上くんが「できる。おまえやったらできる」って言って、自分の筆持たせてくれて。

村上くん　えっ。

ユキオ　やめさせてくれへんかった。

村上くん　……あー……そやっけ？

ユキオ　……

村上くん　それが？

ユキオ　……ううん。思い出しただけ。

村上くん　おう、ほんでさあ、冒険ものやったら主人公は……

ユキオ　もう行かなあかんみたいやわ。

村上くん　あ、おう。

ユキオ　ほなな。村上くん。これからはちょくちょく来れるから。

村上くん　おう。一緒に話考えたるからすぐ来いや。

ユキオ　……うん。

ユキオは去っていく。

村上くんはどっかり座る。

一点を見つめる。

村上くん　ふふふ……

しみ　なあなあ。

村上くん　なに？

しみ　選評、ってすごいの？
村上くん　そらすごいよ。最終選考に残っても、審査員からなんのコメントももらわれへん作品もあるねん。やのに、俺の小説はちゃんとコメントもらえてん。しかもな。重要なんは、その審査員が、南川裕二やってことやねん。
しみ　その人はすごいの？
村上くん　マジですごいベストセラー作家や。
しみ　へえ～！　そんな人に読んでもらえたんや？
村上くん　しかも自分できっちり狙いに行った結果やからな！
しみ　どういうこと？
村上くん　作戦通りや！　過去の受賞作片っ端から読んで？　受賞にどんな要素が必要なんか分析して？　審査員の好みも分析して？　テーマ選びから文体から、全部、賞のために寄せたからな！
しみ　掴み取ったんやぁ。
村上くん　間違ってなかったんやで。俺のやり方。
しみ　東京。
村上くん　……へ？
しみ　東京って、どんなとこやろ？
村上くん　はあ？　知らんわ。
しみ　人、いっぱいおるんかな？
村上くん　さあ？　そこそこおるんちゃう。
しみ　出会いもいっぱいあるんかな？
村上くん　それは人によるやろ。
しみ　あの子、お金持ちなったんやんな？
村上くん　は？　いや、そうかもしれんけど……あんなん、本物ちゃうからな。
しみ　渋谷のオフィスに１４０人を抱える一番トップ。
村上くん　それがなんやねん。アメリカのオフィスに２０００人を抱えるトップもおるやろが。まだまだ自慢することちゃうやろ。
しみ　でも女優さんとつきあってるんやで。
村上くん　浅い浅い浅い。「知ってる？　女優の。」いや、肩書きで紹介すんなて！
しみ　でもあの腕時計……
村上くん　全然似合ってないねん！
しみ　……なあ。
村上くん　……なんや。
しみ　南川裕二の選評とどっちがいいもんやろ？
村上くん　俺は、文豪に、近づいてんねん。

コンコン……
壁がノックされる音。
村上くん　へ……？
コンコン……
村上くん　なんや……？

コンコンコンコンコンコンコンコン……

村上くん　なんやねん！

村上くんの部屋に入ってきたのは、ニワトリの頭をした少年。

ニワトリ頭　村上くん。
村上くん　……ユキオ？
ニワトリ頭　入っていい？
村上くん　……お、おう……。
ニワトリ頭　はー！　良かったー！

ニワトリ頭がトコトコ入ってくる。

村上くん　なんや……？
ニワトリ頭　えーっとぉ……

ニワトリ頭、キョロキョロしながら部屋をウロウロする。

ニワトリ頭　あっ！

ニワトリ頭、部屋の角に近寄る。
途中で転ぶ。

ニワトリ頭　ぎゃっ！
村上くん　なんや、なんもないとこで……
ニワトリ頭　いたた……うんしょ。

ニワトリ頭、起き上がって部屋の角へ。

ニワトリ頭　村上くん、穴や！
村上くん　お、おう……
ニワトリ頭　小さい、穴！
村上くん　うん……
ニワトリ頭　こんなとこに指入れたら抜けへんくなるで！
村上くん　う、うん……
ニワトリ頭　うりゃ！（指を突っ込む）
村上くん　なんでや！
ニワトリ頭　あれ？（抜こうとして）あれ？　あれ？　助けて！　村上くん、助けて！
村上くん　なんやねん……（ニワトリ頭の方へ行く）
ニワトリ頭　痛い！　痛いよぉ、痛いよぉお！
村上くん　ためらいもなくいったよなぁ……？
ニワトリ頭　入れたらあかんと思ったら、入れたくなった！

村上くん　あかんなあ……
ニワトリ頭　やさしく！　やさしく！
村上くん　いけそういけそう。

ニワトリ頭の指が抜けて、反動で尻もちをつく。

ニワトリ頭　ぎゃっ！　ふー。あっ！

ニワトリ頭、壁の隙間から紙を取り出す。

村上くん　今度はなんやねん？
ニワトリ頭　新聞の記事や。村上くんの。
村上くん　はあ？　なんやねん、今更。知ってるよ。結構おっきく載ってたんやろ。弁護士さんに聞いたわ。
ニワトリ頭　ちゃうちゃう。事件のんとちゃう。
村上くん　え……？
ニワトリ頭　１６んときのさ。
村上くん　１６……？
ニワトリ頭　ほーら。ちっちゃく載ったやつ。

ニワトリ頭、小さな新聞の切り抜きを見せる。

村上くん　え……。
ニワトリ頭　第３５回海の街ハートフルストーリーコンテスト、佳作、受賞！　村上ミチルくん！
村上くん　……
ニワトリ頭　大事なもんやん。こんなところにしまっちゃって。
村上くん　……大事ちゃうよ、別にそんなん。
ニワトリ頭　えええ？！　新聞やで？！　大事やん！　ちっちゃいけどな。ちゃんとファイルして一生大事に保存せんと……。
村上くん　……一生って。
ニワトリ頭　だってこんなすごいこと、もう一生ないかもしれへんやん！
村上くん　……
ニワトリ頭　宝箱に入れとこ。ほいじゃあね。

ニワトリ頭、出ていく。
村上くん、一人座り込み、鉛筆を持ってノートに書きつけ始める。
猛烈に……

しみ　あのさ……
村上くん　佳作も賞は賞やんけ！
しみ　そやで。当たり前や。
村上くん　……そやろが。

村上くんは、あの名作になるかもしれない作品が書いてあるノートを持ってくる。

しみ　　またそれ推敲すんの？
村上くん　　うん……。
しみ　　でももう、消灯の時間みたいよ。
村上くん　　……ああ……

暗闇になる。
微かに波が打ち寄せる音が聞こえる。
少年たちのひそひそ声。

ユキオの声　　村上くん。まだ書いてる。
村上くんの声　　あと１ページ。
ユキオの声　　すごいなぁ。こんな時間まで！
村上くんの声　　おう。どないした？
ユキオ　　うん、僕な、すごい文豪見つけた。
村上くんの声　　え、南川裕二より？
ユキオの声　　うん、南川裕二より！
村上くんの声　　すごいな！　どんな話？
ユキオの声　　海の底を歩いてな、プランクトンの死骸を集めてる人がおってな。
村上くんの声　　なんやそれ？
ユキオの声　　今度貸すわ！　あ、僕、そろそろ帰らな！
村上くんの声　　あ、そうなん？
ユキオの声　　うん、お母さん心配するから。村上くんどうする？
村上くんの声　　……あと１ページ。
ユキオの声　　すごいなぁ。じゃあまた明日な！
村上くんの声　　おう。また、明日な。

死神の壁に、隙間が少しできる。
死神の持っているろうそくの明かりが漏れている。

死神の声　　どう……？　今どう……？

村上くんがノートに書いているのが、うっすら見える。

村上くん　　……（消えてしまいそうな声で）いいよ……言ってるやんか……ずっと……
死神　　はぁい……

死神が壁を閉じると、暗闇になる。
しばらくの沈黙。
そして、……カリカリカリ……村上くんの鉛筆の音が聞こえる。

ＡＣＴ・４　　３４歳

薄暗い部屋。
たくさんの本。
村上くんがひとり、座っている。
ぼろぼろのノートに、書きつけている。
そこへ、３４歳のユキオがくる。
ユキオはマフラーをしている。

ユキオ　……村上くん……
村上くん　おー！　ユキオ！
ユキオ　村上くん……久しぶり……
村上くん　おー！　どしたん！
ユキオ　へへ……よかった……
村上くん　は？　何がやねん。
ユキオ　村上くんが、変わってなくて。
村上くん　は？　なんやねん。
ユキオ　ううん。ううん。あ、そうそう。今日は外、すごい雪やよ。もう、バアーって！　すごいの！　斜めに！
村上くん　おう、ユキオ。読んでくれた？
ユキオ　へ？
村上くん　送ったやんけ。新作。
ユキオ　あ、ああー……
村上くん　どやった！？
ユキオ　……まだ、読めてなくて……。
村上くん　……なんやねんなあー。あ、あれやろ。また忙しくしてるんやろ。なんか会社やり始めたって言ってたもんなあ。もうほんま、ユキオは全然変わってない！　学生んときから全然変わってない！　なんのために忙しくするねん、っちゅー話や！
ユキオ　あのな。村上くん。
村上くん　は？
ユキオ　あのな僕、今な。知り合いのバー、手伝ってんの。
村上くん　は？
ユキオ　バー。裏路地の２階にあるの。レンガ色の建物でね。結構流行ってんのよ。
村上くん　え？　えー……え？
ユキオ　え？
村上くん　……バー？
ユキオ　うん。バー。レンガ色の。２階。
村上くん　えー……会社は？
ユキオ　辞めたよ。
村上くん　えー……
ユキオ　２年前かな、もう。
村上くん　えー……
ユキオ　……そっか……もう８年か……
村上くん　は、８年……？
ユキオ　ここ、前来たんがさ。もう今３４やで。歳とったなあ～。

村上くん　３４……。
ユキオ　あのね、会社はね、順調やったんよ。従業員も増えて、業績も上がって……。毎日毎日会社のために、従業員のために、めっちゃ働いた。でもある日、ふっと「あれ？　なんか毎日楽しくないな」って思って。で、僕、そもそもなんのために働いてるんやっけ、なんでこんなこと続けてるんやったっけ、って思ってもうてね。そんで仕事終わりに久しぶりに一人で飲みに行ったの。ほんでそこでね、ある冒険家と知り合ったの。
村上くん　冒険……？
ユキオ　うん。その人ね、アルバイトでお金貯めて、貯まったらすごい危険な雪山登りに行きはんの。死ぬかもしれへん危険なとこやで。なんでそんなとこにわざわざ行くん？　って聞いたら、「自分の魂を燃やしたいから」って……。で、僕、「え、え、それどういうこと？」ってもっと聞いたら、「人生一回きりやから。自分の本当にやりたいことに素直に向き合って生きたいねん」って……。それ聞いて僕、なんでか涙出てきて。そうかーって。思い出したの。僕の原点。僕、ただ、褒めてもらいたかったの。すごいって言ってもらいたかったの。それで人と違うことをやりたかったの。それで会社やりはじめたの。だから、本当は、この仕事をやりたいわけじゃなかったの。確かにはじめは僕も燃えてた。でも、それは認められたいってことに燃えてただけ……それに、気づいたの。僕ってそんな人やったんや、僕自身にはなんもなかったんやーって思ったらボロボロ泣けてきてね。そしたら彼が、「素直な子やな」って優しく笑ってくれて。「また一緒に飲もうや」って。僕が社長やってるの、言ってなかったのに。
村上くん　……へー……
ユキオ　でも去年の冬にね、彼、雪山のすっごい崖から落っこちて。足、動けへんくなったの。もう雪山、行かれへんくなったの。もちろんめちゃめちゃ落ち込んでた……。んやけど、しばらくして突然「地元に戻って、バーやる」って。目、キラキラ輝かせて、「新しい冒険や」って。……それで僕、彼の店、手伝うことにしたの。
村上くん　……え。
ユキオ　今、その彼と住んでんの。
村上くん　……そうなんやー……
ユキオ　結構毎日充実してるで。お金はあんまりないけどさ。
村上くん　……
ユキオ　生涯の友達……見つけたわ。
村上くん　ふー……ん……。
ユキオ　あ、写真見る？　彼の。
村上くん　……ああ、うん。

ユキオは村上くんに写真を見せる。

村上くん　へえー。なんか、色黒いな。
ユキオ　雪焼けかな？　フフフ……。彼が言うてるんやけどね。今にも死ぬっていう命の危険？にぶつかったときにね、本当の自分を感じるんやって。パッと燃え上がるような情熱……っていうか、エネルギーっていうか……うん。でもそれ、まさに命が試されるような雪山じゃなくてもそうできるんやって。毎日の当たり前の日常でも、燃やせるんやって。エネルギー……
村上くん　人間ていうのは、エネルギーをゴオオ～ッて出してるときだけ、本当の姿で。ほんまはずーっとエネルギー出し続けなあかんって。じゃないと、死んでるも同然なんやって。
ユキオ

村上くん　……へえー……。
ユキオ　僕、それ聞いた時に、ハッてなって。
村上くん　……
ユキオ　苦しい苦しいってなってんのってネガティブなイメージやったけどさ。そうじゃないんやなって。
村上くん　いや、そんなん分かってたやん。
ユキオ　へ？
村上くん　そんなんずっとそうやったん。本書いてるとき。
ユキオ　えー……
村上くん　本なんてさ、苦しみの中から生まれるもんやん？　心の中の自分の大事なもんを燃やして生んでるやろ？　それで生まれてんねん。分かってたやろ。そんなこと。ユキオも書いてたんやから。
ユキオ　……
村上くん　何をいまさら。そんな。
ユキオ　……へへ……。
村上くん　どうかしてるわ。
ユキオ　……
村上くん　で、次どんなん書くの。
ユキオ　え……
村上くん　田舎の少年の話でも書いたらいいんちゃうん。自分の経験したことでさ。
ユキオ　ああ……。
村上くん　そういうんやったら書けるやろ。
ユキオ　村上くん……。
村上くん　あ？
ユキオ　初めて村上くんと会った日。覚えてる？
村上くん　松ぼっくりやろ？
ユキオ　え？　松ぼっくり？　あ、いや、ううん。小学校3年の時、村上くんが転校してきてすぐ。僕、ニワトリニワトリ、くさいくさい、って周りに人がぜんぜんおらんかったやろ。それ小学校入ってからずっとやってんけどな。村上くんは、そんな僕見て、「おまえ、そんなん言われてんのダサいで」って言ってん。
村上くん　……
ユキオ　ほんでそのあと、遠巻きにしてる子らに向かって「おまえら、そんなこと言うてんの、めちゃくちゃダサいで」っておっきい声で言うてん。……あれな、めっちゃ嬉しかった。カッコいいな、って思った。すごい子やなって……。
村上くん　……
ユキオ　でも、それ言われても、僕一人ではその状況変えられへんかったけどさ。……あのとき、ありがとう。村上くん。
村上くん　……
ユキオ　……ほな、ユキオももっとカッコいい本書かんとな。
村上くん　……
ユキオ　燃え続ける炎、みたいなさ。
村上くん　……ふふふ。……あ、そろそろ行かなあかんみたいやわ。
ユキオ　あ、そうなん……。もう？
村上くん　またすぐ来るわ。
ユキオ　おう。

ユキオは去っていく。
村上くんはノートを広げ、鉛筆をそこに押し付ける。
力をこめ、書いていく。

しみ　村上くーん。
村上くん　ん？
しみ　村上くーん。
村上くん　なにい。
しみ　あの子、すごいな。
村上くん　え……？
しみ　お金も地位も捨ててさ、本当の幸せみたいなんつかんでるやん！
村上くん　……はあ？
しみ　おだやか～でニコニコ～ってして。これ以上ないわ～って。幸せよ～って！
村上くん　……おれはあんなんが幸せやとは思わんで。
しみ　嘘ぉ。それにほら、村上くんに素直にお礼も言うてたで。すごない？
村上くん　ぜんっぜん、すごない。
しみ　えー！　嘘ぉー！　村上くんあんなん言えるぅー？！
村上くん　幸せってのはあんなんじゃないねん！　あんな腑抜けた燃えカスみたいなんじゃないねん！　俺は「上」を目指してんねん！　そう、歴史に名を残すような文豪！　そこを目指してんねん！　ユキオのあんなん、誰にでも手に入るような些細なもんやんか。あんなもんで幸せなんて妥協やろ。俺は、ほんの一握りの人間にしか見られへん景色を見たいねん！　それこそが、ほんまの一番の幸せやろ？！
村上くん　でも村上くん、ずーーーーっとしんどそうやん。
しみ　……
村上くん　ユキオくんは幸せそうな顔してたで。
しみ　……
村上くん　ユキオくんの見てる景色のほうが、きれいな景色なんちゃう？
しみ　……
村上くん　これはもう……あの子の勝ちなんちゃう？
しみ　え……？
村上くん　ユキオくんの勝ち。
しみ　ちゃう！
村上くん　ユキオの勝ち！　ユキオの勝利！　佐藤ユキオくんー！　優勝ー！　ワー！！
村上くん　ちゃうって！　まだ勝負は決まってない！

コンコン、ノックの音。

村上くん　え……なんやねん……！

コンコン、コンコン、コンコン、コンコンコンコンコン……！

村上くん　な、なに、なんやねん……！　なんやねん……！

ニワトリ頭がひょっこり顔を出す。

ニワトリ頭　村上くん！
村上くん　な、なんや……？
ニワトリ頭　ちょっと忘れ物！
村上くん　なにを……？
ニワトリ頭　僕いっつもウッカリさんやからぁ……。なあ？
村上くん　そうやな……。

ニワトリ頭が部屋の片隅をゴソゴソ探る。

ニワトリ頭　あった！

ニワトリ頭、探し当てた小さい紙を見せる。

村上くん　……（ため息）。もうええって。そんな何個もファイルせんでいいねん。佳作ぐらいの……
ニワトリ頭　ちゃう！　これは僕のや！　ほらこれ、僕！　これ、市長さん！　これ、表彰状！　「小説コンテスト、最年少で最優秀賞受賞、佐藤ユキオくん、カッコ１４」
村上くん　……へー。
ニワトリ頭　ほら村上くんよりおっきい記事やろ！　ほら！　村上くんのは、これぐらい。これぐらい。
村上くん　……それがなんなん。
ニワトリ頭　すごいやろ！　あんな厳しかったおじいも褒めてくれたんやで！　学校でも、僕のこと馬鹿にしてたやつらがみーんな、すごいすごい言うてくれたんやで！
村上くん　それが？
ニワトリ頭　えええええー？　すごいやん！　市長さんと新聞やで！
村上くん　新聞なんか、どうでもいいことやんけ！　ほんまの価値を分かってないもんがそういうんで評価するんや。新聞見てすごいすごい言うてるやつらが、ユキオのあの物語、読んだんか？　あの物語読んだ上ですごいて言うてくれてるんか？　新聞見ただけで言うてるんやろ。そんなん嬉しいんか？　新聞なんか、ほんまに、どうでもいいことやんか。ほんまに重要なのは、おもろい話を書いたかどうかやろ？
ニワトリ頭　……ほんまに重要なのは、多くの人に認められることやろ？
村上くん　……
ニワトリ頭　って、村上くんずっと言ってたやん。
村上くん　……
ニワトリ頭　それに、新聞載らなみんな読んでくれへんやん！　新聞載るまでは、みんな僕のこと馬鹿にしてたやん！　勉強もせんとアホちゃうってみんな言うてたやん！　それが新聞載ったらみんなすごいな、って言ってくれたやん！
村上くん　ユキオ！　こんな地元新聞の記事で満足してんなよ！
ニワトリ頭　最優秀賞やで！
村上くん　……
ニワトリ頭　第３３回、海の街ハートフルストーリー、最優秀賞。
村上くん　……そんな小っさい賞で、
ニワトリ頭　一等賞やで。

村上くん　……
ニワトリ頭　そや。村上くんも、体験したこと、書いたらいいんちゃう？
村上くん　……
ニワトリ頭　だって僕の賞もらった話、自分の話やもん！　それで、ほら、ここ、「少年らしいみずみずしい感性を評価されて……」って書いてあるで！
村上くん　……
ニワトリ頭　だから、村上くんも、なんか体験したらいいねん。そしたらもっといい賞、取れるんちゃう！
村上くん　……
ニワトリ頭　体験、体験、体験、体験！　ワー！

ニワトリ頭が帰ろうとする。
村上くん、ニワトリ頭の腕を掴む。

村上くん　したやんか。体験。おれだけの、おまえにはできへん体験。
ニワトリ頭　へ……？
村上くん　お母さんが少年を睨みつけ「あんたが死んだらよかったのに」と叫んだその時、少年はこう思いました。「あれ、さっきの感触どんなんやったっけ」。アイツを刺した肉切り包丁の感触のことです。ずぶ……？　さく……？　ぐりっ……？　どんなんやっけ。あかんあかん。忘れたらあかん。せっかく刺したのに、もったいない……あ……もう一回すればいいんじゃないか？　ほらここに、まるで少年を悪魔のように見ている目がある。感触を心に刻み込むために。少年は、お母さんの肩に、包丁を、差し込みました。ああー……そうそう。こういう感じ……。あ、場所によって、感触違うんかな。例えばお腹は？　……はいはい。なるほど。じゃあ、首はどうやろ？　……骨があって、こういう感じ……。じゃあ、目は？　ああ……また、新しい感じで……。床に広がった赤い液体を掬ってみると、生暖かい……。少年はお母さんと男に油をかけて、火をつけました。神社でお守りを焼くのは、この世の悪いものを吸いとったのを、炎で浄化するためだと聞いたのです。浄化していく炎を見ていたら、つま先にも届いてアチッとなったので、少年はアパートを飛び出しました。……外は、真っ赤な夕焼けでした。……少年は夕焼けの下、燃え盛るアパートの前でノートを開きました。……ぐさ、ずる、にゅりにゅり……ちゃう、もっと……ぐぶ、ずずず、ちゃくちゃく……
ニワトリ頭　なな、なんの音……？
村上くん　体験やん。おれの。
ニワトリ頭　体験……なんでそんな体験……
村上くん　……あの日はちょうど、第３７回海の街ハートフルストーリーコンテスト、応募締め切りの前の日だったんです
ニワトリ頭　第３３回海の街ハートフルストーリー……
村上くん　それはおまえの最優秀賞の時やんな！？
ニワトリ頭　だ、第３５回！　海の街ハー……
村上くん　それはおれの佳作の時や！
ニワトリ頭　第、３７回、海の街ハートフルストーリー……
村上くん　そう。毎年必ず応募しているコンテストの締め切りの前の日だったんです。破られていく原稿を見ながら「あー次は何を書こう」と考えて、それで、思いつきました。なかなかできへん体験、するチャンスちゃう？　これ、賞取れるかもしれへん、うまくいった

ら本、出せる。だって、センセーショナルやん。お母さんのために、悪い男を刺して火をつけてしまった未成年。いい筋書きやん。……だから少年は、その時の感覚を書くために、特殊な感性を記して発表するために、あの日、そうしたのです。体験、するためです。なあ。おれはそこまで覚悟してやったんや。そんなおれに、おまえ、勝てるわけないやろ？

ニワトリ頭　イヤッ！

ニワトリ頭は村上くんの手を振り払う。
そして、逃げていく。
村上くんは、深呼吸して、ノートを開く。
鉛筆を握りしめ、ノートに書きつけていく。
死神の声が聞こえる。

死神の声　ろうそくは、芯が燃えて、火ぃになる。芯がないと、燃えへんわ。芯は、苦しみ。苦しみや……。苦しみ……を……燃やす……ことで……ゆらめく……きらめく……燃えさかる……火ぃに……なる……。

死神の壁が開く。
死神が顔を出す。

死神　火ぃは、苦しみと……喜びの……はざまで……。揺れる……揺れる……心にあわせて、燃えさかる……。燃える……燃えさかる……にんげんの、生命。生命……。揺れて燃える。火ぃみたいに。……火ぃは、熱い。触られへん。火ぃは、暗いところで光を放つ。美しい。火ぃは、ゆらゆらゆれる。不規則に。それが一層、美しい。

死神の持つろうそくの火で、村上くんが浮かび上がる。
必死に文章を書いている。

死神　きれいなあ……

死神、村上くんを見つめる。

ＡＣＴ・５　４０歳

村上くんが一心不乱に鉛筆を走らせている。
そこへ、４０歳のユキオが来る。

ユキオ　村上くん……！
村上くん　おー！　ユキオ！
ユキオ　よかった……
村上くん　え？　なにがや？
ユキオ　間に合って……

村上くん　は？　なんやねん、それ。
ユキオ　だって、決まったんやろ……。刑……。
村上くん　あ？
ユキオ　いや……ううん。
村上くん　なんやねん、ユキオ。おまえ、ちゃんと書けてんのか？
ユキオ　いや、あのな、村上くん……
村上くん　バーはうまいこといってんのかい。バーは。またどうせ忙しくしてるんやろ。どうせ。おまえはずうっとなんのために毎日忙しくしてるねんな。
ユキオ　あの……
村上くん　忙しいのが好きなんか？　まあ忙しかったらなんか充実してる気になるもんなあ。
ユキオ　あのさ……村上くん。
村上くん　いや、ええんやで、忙しいのが好きなら好きでさあ。忙しいってことが人生の目的でもさあ。でもおれは、おまえには書いてほしいなって思ってんねん。
ユキオ　僕、本、出すことになってん。
村上くん　……。……は？
ユキオ　本。
村上くん　……
ユキオ　出るねん。
村上くん　……
ユキオ　こないだ……さ。ここに来たあと、あれからまた小説のコンクール、応募し始めてさ。久しぶりに……。そんで一昨年（おととし）にな……ある出版社がやってる賞の、大賞もらって。そんで、そっから編集さんついてくれて。いろいろ話し合って。そんで、本出してみよって。
村上くん　……へえ……

ユキオは、ハードカバーの本を取り出す。

ユキオ　これ、最終確認の見本。
村上くん　……みほん……？
ユキオ　村上くん、僕、書いたで。
村上くん　……
ユキオ　書いたで。
村上くん　……「ニワトリと……少年」……
ユキオ　そう。僕の初めて書いた小説。中1んときに初めて書いたやつを、もとにして。リライト。
村上くん　……
ユキオ　ほら、夏休みの宿題の自由作文でさ。僕が書いてみたやつ。村上くんは覚えてないかも知れんけど……。あれやねん……。やっぱあれが、僕の一番の思い入れある作品やから……
村上くん　……
ユキオ　だからさ、村上くん！
村上くん　……へ？
ユキオ　僕、僕、僕……
村上くん　なんやねん。

ユキオ　僕……すごいかな！？
村上くん　……。
ユキオ　……。
村上くん　……
ユキオ　……や――――――――、まあ、普通ちゃう。
村上くん　……え……
ユキオ　普通。
村上くん　……
ユキオ　……そっか。
村上くん　おう。
ユキオ　……
村上くん　……なんか……腹、減ったな？
ユキオ　……あー、別に。僕は。
村上くん　そっか。なんかガッツリしたもん食べたいな。
ユキオ　……へー。
村上くん　おう。どしてん。ユキオ。
ユキオ　僕……、帰るわ。
村上くん　おう。そうなん。またな。
ユキオ　……また……？　でも村上くんはもう……
村上くん　……なに？
ユキオ　……ううん。またな。また、来るわ……。

ユキオ、去っていく。
村上くん、動かない。

しみ　むらか……

村上くんは、急いで立ち上がり、しみに書いてある顔を鉛筆でぐちゃぐちゃにして消してしまう。
そして、また村上くんは座り込む。
じっと、じっと、ただ、天井を見つめる。
ただ、じっと、見つめる……

ニワトリ頭がひょっこり顔を出す。
トコトコ入ってきて、村上くんの向かいに座る。

ニワトリ頭　村上くん。村上くんが書いた初めての小説。覚えてる？　１３歳のときに書いた、タイムマシーンで何回も過去をやり直す男の子の話。書いてるとき、村上くん、楽しそうやったぁ。毎日な、海の洞窟来てな。にやにやしながらな。ほっぺた赤〜くしてな。猫背になってな。ちっちゃい机にかじりついてたな？　出来上がったとき、村上くんはおっきい声で「できたー！」って叫んだなぁ。僕、耳キーンってなったで。ほんで僕に読ませてくれて。僕が読んでる間ずっと僕の顔見てたな？　読み終わったら僕にいっぱい喋ってくれたな？　ここで主人公がこう言うんはこういう理由やからやとか、ここがここの伏線になってるんやとか、主人公と同じ顔してたな？　聞いてる僕も、村上くんと同じ顔してたわ。村上くん。あのとき、楽しかったな？　なあ、村上くん？

村上くんは、ふと思い出して、本を探す。

いくつもの本の下に埋もれていた、一冊の本を取り出す。
その本は、２１歳のユキオに、よくわからなかったと言った、文豪の本。
村上くんが、その本を開く。読み始める。
波が打ち寄せる音が聞こえてくる。
ニワトリ頭が逃げ帰っていく。
波の音が大きくなっていく。
津波のような大きな波の音が聞こえ、すべてを飲み込む。
……ゴポゴポ……
水中の音。
その音に混じって、少年たちのひそひそ声が聞こえる。

ユキオの声　宿題終わった？
村上くんの声　まだに決まってるやん。
ユキオの声　自由作文なににする？
村上くんの声　はあ？　なんか詩でも適当に写すわ。
ユキオの声　僕な、小説書いてん。
村上くんの声　は？　え、小説？　そんなん書けるんか？
ユキオの声　見てみて。
村上くんの声　え、もうあんの？
ユキオの声　うん、「ニワトリと少年」てタイトルやねんけどな……
村上くんの声　おう、なんかすごいな。
ユキオの声　僕と、村上くんの話やねん。
村上くんの声　ニワトリと、少年……？
ユキオの声　僕と、村上くん……

村上くんが溺れる。
水中で漂いはじめる。
しばらくして、そこへ、潜水服を着た人物が来る。
潜水服は村上くんを助ける。
村上くん、目を覚ます。

村上くん　……誰……？
潜水服　さあ、誰であろうか。
村上くん　……いや。知らないっす。
潜水服　……答えは、生き物の死骸を拾う旅人である。
村上くん　生き物の死骸？
潜水服　（何か拾う）……ほら。（懐中電灯で照らして）これだ。この海に浮遊していた小さき者。
さあ、この者にはいかなる歴史が積もっているのか。（腰に下げた袋に、丁寧にしまう）
村上くん　……プランクトン？
潜水服　イエス！　よく知っているな。僕の本を読んだのかね？
村上くん　……文豪……？
文豪　イエス、そう呼ばれることもあるな。（歩き始める）
村上くん　……（ついて行きながら）文豪。
文豪　どうした、少年？

村上くん　俺、文豪の本、おもんなかったっす。
文豪　……。
村上くん　……もっと、多くの人が楽しめるもん、書いた方がいいと思います。
文豪　（村上くんに迫って）ほう……？
村上くん　あ……えっと……あの……す、すみません……
文豪　わっはっはっは！
村上くん　え……
文豪　きみは今、苦しんでいるのだね？
村上くん　えっ……？
文豪　もっと書く技術を高めたい。書くことにおいて、もっと高みを目指したい。多くの人に認められなくてはならない。書くことで、金も名誉も手に入れたい。
村上くん　……あたりまえの気持ちじゃないですか……。せっかく人生をかけてやってるんですから……。
文豪　なのに、どれだけ頑張っても何者にもなれていない。
村上くん　……
文豪　だからもっと自分をいじめるように追い込んで、それでもっと苦しくなる。しかし書くのをやめても、また苦しい。書いていない時間は腑抜けていると感じるからな。だから書く。そしてまた苦しんでいる。
村上くん　……
文豪　あたりまえだよ、きみが苦しいのは。なぜなら、きみは小説を書いていないのだからな。
村上くん　え……いや、書いてるわ！　毎日！　ずっと！　人より時間も人生もかけて！　俺より書いてるやつはおらんぐらい書いてる！
文豪　おや？（何か拾う）
村上くん　おい。聞けや。俺は書いてるって。これ、見ろや！（ノートを見せる）
文豪　きみが書いているのは、こんなことを書けば評価されるんじゃないかという計らいである。きみは、野心を紙にぶつけているだけなのだ。
村上くん　……え。
文豪　（拾ったものを見せて）見たまえ。美しい死骸だ……
村上くん　話そらすなや！（文豪の手を振り払う）
文豪　……（振り落とされた死骸を目で追って、村上くんを見る）
村上くん　……すみません。
文豪　きみは今、旅の途中なのである。
村上くん　え？
文豪　きみは、多くの人に認められる小説家になるという目的地を目指して旅をしている。しかしきみは、前しか見ていない。目標や結果ばかりに気を取られている。
村上くん　それが……？
文豪　それでは苦しみからは抜けられない。
村上くん　はああ？！
文豪　……（村上くんの方にグッと近寄る。）
村上くん　（怯む）なっ……
文豪　ここにも。（村上くんの体についたものをとり、しまう）
村上くん　……な、なんやねん……じゃあどうやったら……
文豪　（振り返って）はあああ！！！
村上くん　（びっくりして）へっ？

文豪　すばらしい……。大量の死骸たちが、ちょうど射し込んできた光によって輝いている……。
村上くん　（文豪、座り込む）さあ、きみも。
文豪　え……
村上くん　さあ。
文豪　……（仕方なく、座る）

二人は、ゆらゆらと波に漂う。

村上くん　……文豪……
文豪　どうだい。この景色は。書きたくなってこないか？
村上くん　え？
文豪　大いなる命の営みの重なり。積み上げられた大いなるエネルギー。全身に感じるじゃないか。……だから僕は書くのだよ。
村上くん　え……？
文豪　溢れてくる感動や衝動。それに突き動かされて、書くのだよ。書かざるを得ないから書くのだよ。それがないなら、書くのが苦しいのは、あたりまえだ。
村上くん　……
文豪　きみは順番が逆なのである。多くの人に認められるために書くのではないのだよ。きみが日々の生活の中で感じた、喜び、悲しみ、怒り、哀愁、または、言葉にできないような感情。そういった、きみの心を突き動かすものによって、書かずにはいられなくなって書き、そしてその、きみの心に共鳴する人たちが集まり、結果として認められるのである。

村上くん　……
文豪　この景色はどうだい？　少年。きみを突き動かすか？
村上くん　……別に……。
文豪　はっはっは！　いいんだ、きみには別の、きみの命の景色があるんだろうからな。
村上くん　俺の、景色……
文豪　きみは今、旅の途中なのである。きみは、きみの景色を探すのだ。しかし、前ばっかり見ていては、見つからない。足元を見るのだよ。足元に咲いているきれいなお花を。周りを見るのだよ。瞬間瞬間で移り行く風景を、光を、命を。五感を研ぎ澄ませるのだ。そして感じるのだ。自分の心を突き動かすものを。今という瞬間をしっかり見つめるのだ。人生というものは、今という瞬間の積み重ねでしかないではないか。旅の道のりを楽しむのだ。……行こう。波の向きが変わったようだ。

村上くん　……文豪。
文豪　イエス。
村上くん　それで……それで、いろんなものを見て、多くの人が感動するような景色を見つけたら勝ちってことか……？
文豪　きみはなにをそんなに恐れているのだ？
村上くん　え……？
文豪　見つけるのはきみの景色でいいのだよ。きみだけのな。
村上くん　そんなん……俺だけがおもろかったって、なんになんねん……！
文豪　なんにもならなくていいのだ。
村上くん　え……
文豪　「人生とは、真の自分を見つける旅路である。それに失敗したなら、ほかに何を見つけ

ても意味はない。」そう言った作家もいたな。

村上くん　……

文豪　自分の景色を見つけるのだ。そのときに湧き上がってきた感動と衝動を疑わずに、まるごと、そのまま、認めるんだ。

村上くん　……でも、それで誰にも、誰一人にもおもしろいって思ってもらわれへんかったら……

文豪　世界は絶えず、きみを不安にさせて、何者かにならないといけないように思わせてくる。しかし、きみは自分を守り抜くんだ。それが一番、偉大なことなのだよ。

村上くん　……でも……

文豪　原点に戻るのだ。計らいや野心を捨てて、純粋に書くのだよ。子供のように。あの頃はただただ楽しんで書いたのだろう？　創作というものの楽しさを思い出すのだ。

村上くん　……子供の頃……

文豪　……（発見する）はっ！

村上くん　へ？

文豪　あれは……！

村上くん　なんすか？

文豪　海神様（うみかみさま）だ。

村上くん　えっ……？

文豪　あいつが行く先には、たくさんの種類の死骸があるのさ。追いかけなくては。じゃあな。（行こうとする）

村上くん　文豪……！　俺は……！

文豪　大丈夫！　僕は書き続けている！　それをまた読んでくれたらいいんだ！　読みたいと思った時に。そうしたら、僕と会話ができるからな！　じゃあな！　きみ！

文豪、海神様を追って去っていく。

村上くんは、自分の書き続けたノートを開く。

ＡＣＴ・６　４２歳

薄暗い部屋。

村上くんがノートを読んでいる。

今まで書いてきたノートを読んでいる。

しみ　（潰れたような声で）なあ。

村上くん　うん？

しみ　（潰れたような声で）なあ、なあ。

村上くんは、ぐちゃぐちゃに塗り潰したしみを描き直す。

しみ　ふう。

村上くん　久しぶり。

しみ　……何読んでんの。

村上くん　今まで書いたもの。
しみ　ふーん。いつから読んでんの？
村上くん　え？　ああー、前ユキオ来てからかな。
しみ　えっ。２年も？
村上くん　え？　そんな、経ってたんや。
しみ　うん。そんな集中してたんや。……で、どう？
村上くん　……結構おもろい
しみ　おー……
村上くん　俺ってこんなこと考えてたんやな……
しみ　へえー。いいやん。
村上くん　……。（ノートを閉じて、天井を見上げる）
しみ　どしたん。
村上くん　ここに来てなかったら、どうしてたんやろ、おれ。
しみ　ええっ、そやな……。大学行ってたかな？
村上くん　やー。それは無理やろ。お金なかったし。
しみ　ほな就職かなあ。
村上くん　まあ、そやろなあ。
しみ　配達の仕事とかどう？
村上くん　おー。そうしとこか。
しみ　毎朝目覚ましかけるやろ？
村上くん　そうやな。
しみ　仕事終わったら焼き鳥屋に行くやろ。
村上くん　駅んとこのな。あそこ、大人になったら一回行ってみたかってん。
しみ　そこの店のおっさんと仲良くなってさ。
村上くん　一緒におっさんのいきつけのスナック行って盛り上がってな。
しみ　そんなお酒飲んでたらお腹出てくるやろ。
村上くん　駅の反対側にジムあるやん。そこ行こ。
しみ　結婚したかな？
村上くん　どうやろな。そんな人、どこで知り合うんやろ。
しみ　多分、ジムでよく見かけるランニングマシーンの子やわ。
村上くん　なるほどな。
しみ　二階建ての家、買ってさ。
村上くん　結構頑張ったな。子供は？
しみ　ふたり。ほんで、あと、おっきい白い犬。
村上くん　お母さん、呼ぼかな。一人やったら寂しいやろ。
しみ　いいよ。海外旅行はするやろ？
村上くん　一回ピラミッド登ってみたいねんな。
しみ　クジラの親子見なあかんしな。
村上くん　あと、オーロラ。
しみ　多分、奥さん、庭でトマト育てるんが趣味やで。
村上くん　ええな。
しみ　村上くんの趣味は？
村上くん　え？
しみ　お休みの日はなにすんの？

村上くん　……
しみ　なにすんの？
村上くん　いっやろな。
しみ　何が？
村上くん　……執行の日やんか。
しみ　……まだまだ待たされるんちゃう。今までもずっと待たされててんもん。
村上くん　でもすぐかもしれん。
しみ　そやな。……怖いの？
村上くん　……別に。
しみ　なあ。最後になにか言い残したいことはあるか、って聞かれたらなんて答えよか？
村上くん　え……
しみ　最後になに食べたいって聞かれたら、なんて答えよか？
村上くん　あー……。
しみ　村上くん、ずっと書く以外のことしてなかったやんか。
村上くん　……うん。
しみ　他のことしてなかったやんか。
村上くん　うん。そやな。
しみ　後悔してないかって聞かれたら、なんて答える……？
村みくん　……
しみ　……
村上くん　……ふふふふふ。
しみ　……へへへへへ。
村上くん　あ。
しみ　うん？
村上くん　こってりのラーメン、がいいわ。最後に食べるん。
しみ　あ～わかるわかる。
村上くん　そやろ。
しみ　フライドチキンも捨てがたくない？　あ、ちゃうちゃう。あれやわ、麻婆豆腐、あれがいいわ。あ、いやしかし……

村上くんは、ノートを広げ、鉛筆を押し当てて、書きつけ始める。

しみ　書くんや。
村上くん　うん。
しみ　ふふふふふ……

村上くんは、楽しそうに描き始める。
ノックの音。
村上くんは顔をあげる。

しみ　……今日、やったんやな。

村上くんは、立ち上がる。

しみ　　それ、持ってくの？
村上くん　うん。

村上くんは、しみに描いた顔を消し始める。

しみ　　（消されながら）ふへへへ、こそばい。こそばい。こそばいわ。ふへ、ふへへ……ばいばい。村上くん。また遊ぼうな。

死神の壁が開いて、死神が現れる。
壁から出てくる。
村上くんと死神が対峙する。

村上くん　来たか……
死神　　今、どう？
村上くん　……いいよ。
死神　　……もう、終わりやで。
村上くん　知ってる？　ケーキの上にろうそく立てるんは、火ぃ消えた時に出る煙が、願い事を天に届かすかららしいで。
死神　　へー。

村上くん、死神のもっているろうそくを吹き消す。
暗闇になる。
微かに波の打ち寄せる音。

村上くんの声　ユキオがすごいのは、あの物語、書いたことやで。
ユキオの声　　えー？
村上くんの声　あの、初めて書いた夏休みの自由作文。
ユキオの声　　うーん……。でもあれ、先生にいっぱい赤で直されてん。漢字間違ってるとか。
村上くんの声　だってな、おれ、あれ読んだときすごい衝撃でさ……
ユキオの声　　うそー。慰めんでもいいで。
村上くんの声　あれ読んで、おれもこんなん書きたいって思ってんもん。

〈終〉